

# 「一八四〇—一九〇〇年におけるイギリス労働者の生活水準」

西洋史英班 岩井仁美

## はじめに▽

産業革命によって、イギリスの労働者の生活水準はどのように変化したか、という問題については、産業革命による労働者の窮乏化を指摘し、生活水準の悪化を主張する「悲観説」と、窮乏化を否定し、生活水準の向上を主張する「楽観説」との間で論争が続けられている。

本稿では、この問題に対する手がかりを得るために、「悲観説」、「楽観説」の立場を取る二つの論文を紹介したい。

「十九世紀におけるブラック・カントリーの生活水準」

George J. Barnsby: The Standard of Living in the Black Country during the Nineteenth Century; in: Economic History Review, Second Series, Volume XXX, 1977, Pp220-239

ブラック・カントリー（以下BCと略記）は、イングランド中央部・スタッフォードシャー南部から、ウースターシャー北部にかけての約一三〇平方キロメートルの呼称である。この地域には、採掘の容易な石炭と鉄鉱石が豊富にあり、中央部の丘陵には石灰岩が存在しているために、一七五〇年ころから製鉄業が目覚ましく発展した。多数の製

鉄工場がはき出す黒煙は、付近一帯に立ち込めてBCの名を生んだのである。BCは現在でもイングランド有数の重工業地帯として知られている。

この論説は、一八四〇年から一九〇〇年のBCにおける労働者の生活水準を彼らの賃金や購買力を通して確認することを試みているものである。

## (一) BCの貧困状態について

統計学者によると、一八五一年から一九〇〇年の間で失業率は一〇パーセント上昇したにすぎないが、それにもかかわらず同時代の資料は貧困と飢餓が十九世紀の大体を通じてBCの特徴であったことを示している。この矛盾は、統計学者の使用する指数が操業短縮を考慮に入れていないために生じたものである。この操業短縮はBCの労働者の大部分に適用されたためBCの貧困の主な原因とされた。そして十九世紀におけるBCの貧困状態は幾度も全国的な関心事となった。例えば、大不況の初期である一八七八年に、新聞は「絶対的な飢餓がウルバーハンプトン（Wolverhampton）の多くの家庭で起っている。」「一六〇の溶鉱炉のうち、たった四〇しか操業されてお

らず、一三〇人の鉄工が行き詰まっている。」「クリスマスにはどのような祝事も行われないだろう。」<sup>(1)</sup>という見出しで報道を行っている。

このようにBCの貧困の事実は議論の余地はない。問題はその程度を明らかにすることである。コースレイ(Coseley)の町区からの報告は、それについていくらかを明らかにしている。一八六一年のコースレイの町区では総人口は約二六三〇人であったが、一六六世帯八二二人は全く資産を所持しておらず、七四世帯四八八人の収入は、一週間に一人当たり一シリングであり、一三〇世帯八二〇人の収入は一週間に一人当たり二シリングであった。以上のようにコースレイの総世帯の八〇パーセントは家族の生活を維持していくだけの収入を得ていなかったのである<sup>(2)</sup>。

#### (一) 名目賃金

次に、十九世紀のBCの労働者の賃金に目を向ける。本項で扱うのは名目賃金である。

一八七〇年代の炭鉱の衰退まで労働者の大部分を構成した坑夫の一日の賃金は、一八五〇年の賃金を一〇〇とした指数によると、四〇年代は七九―一六七の範囲を動き、五〇年代には一〇〇―一二五の範囲を動いたことから、四〇年代には大きく変動し、五〇年代には変動が小さくなったことが分かる。また、六四年以降では、最高一八三を示す七〇年代初期までの繁栄、一一七を上回るものがない、その後の大不況の時期が明らかになっている<sup>(3)</sup>。

他の主な職業の一日の賃金について見てみると、精錬工は坑夫とほぼ同じ動きを示すが、釘、鎖などを製造する手工業労働者の賃金は下

落することはあっても上昇することはない。これとは対照的に、れんが積工や大工のような建築労働者はBCで唯一の裕福な労働者のグループであった。彼らの賃金は、十九世紀を通じて絶え間なく上昇している。実際には、天候や冬の日照時間などによって仕事が制限されてしまったため、賃金上昇しても他の労働者と同程度になるのである。また土木技術者(engineer)の賃金には、長期間の安定という特徴があった。

以上のような、賃金に関するデータを要約すると、精錬工と坑夫の賃金は大きく変動しているということ。土木技術者の賃金はほとんど変化がないということ。建築労働者に対する賃金のみが上昇しているということ。手工業労働者は長期間窮乏していたということが指摘できる。つまり一般的にヴィクトリア時代の繁栄の頂点の期間と見なされる、またBCにおける鉄と石炭産業の生産の頂点の期間と見なされている一八五〇、六〇年代において、労働者の賃金上昇する傾向は、認められないのである。

#### (二) 実質賃金

次に多くの資料によって裏付けされている坑夫の実質賃金の指数について見ていく。これは、一八五〇年を一〇〇としたものであり、これによると、一八三八―四〇年は八九を上回ることなく暴落の程度は明らかである。また、四〇年代後半のにわか景気は実質賃金の指数を最高一二三まで上げたが、五三年から再度下落が始まり、五五年までには、クリミア戦争期のインフレーションの影響で指数は八二まで下がった。一八七〇―七四年のにわか景気は、指数を三〇―四〇パー

セント上げたが、その後大不況が続く。一八七八―一九年には、指数は約二〇パーセント下がり七八を示し、八三年まで、一〇〇を上回ることとはなかった。八三年から状況は好転して指数は絶えず上昇を続けている。そして、この世紀のまさに最後の年である一八九九年には実質賃金の指数は一八九に達したのである。また、七八年からの数年間の実質賃金は四〇年代のそれと同程度に悪かったという事実もある(3)。

同じ手順で他の労働者について実質賃金を見てみる。精錬工は、四〇年代の状態が大不況期と同程度に悪い。さらに繁栄期とされている九〇年代初期でさえ、五〇年の実質賃金を一〇〇とした場合に九一を示し、その向上は見られないのである。次に建築労働者であるが、これは週六日間の完全雇用を仮定した際に、名目賃金が四七年頃から途切れない上昇を示す唯一の労働者のグループであったが、前述の通り、厳寒や降雪による冬期の労働時間の短縮などで、結局実質賃金は他のグループと同程度である。また土木技術者の実質賃金は完全雇用を仮定したとしても、少なくとも六〇・七〇年代の期間で、七八、八四というように一八五〇年の水準を下回っていたのである(4)。

調査された労働者のグループにおいて、九〇年代まで実質賃金上昇を示すものは全くない。ただ、坑夫と建築労働者のケースでは、実質賃金は十九世紀の終わりにそれぞれ一七九、二〇九という様に、一八五〇年のほぼ二倍になった。しかし五〇年以後の半世紀で全ての労働者のグループで実質賃金が一八五〇年の水準を下回っていたことは明らかである。

男、妻、子供2人が生活するのに必要な最低限の週給

四生活水準

1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900
14 s.7 $\frac{1}{2}$ d	12 s.6 d	14 s.0 d	13 s.4 $\frac{1}{2}$ d	13 s.4 $\frac{1}{2}$ d	11 s.10 $\frac{1}{2}$ d	12 s.1 $\frac{1}{2}$ d

Sources : Ibid., p. 229

s : shilling, d : penny

物価の、生活に関連した項目における変化を計算することによって、快適な生活の水準の最低限で家族を維持していくための費用を見積もることが可能である。事実、食糧品価格の動きは多くの資料で十分に裏付けされたものである。これらの資料から導き出された夫婦と子供二人が生活するのに必要な最低限の週給は上記の通りである。

この表を参考にして労働者の生活水準を見ていく。労働者の中で最も大きなグループである坑夫は一八四〇―一九〇年の期間でその生活状態は、快適な水準に達することはなかった。これに対して精錬工は、四〇年代にすでに週三九シリングの収入があり、快適な水準の最低限を上回っていた。土木技術者は一日に五シリングの収入を得ており、ほぼ水準上に位置していた。また建築労働者は四〇年代では一日の賃金が二シリング八ペンスから四ペンスの範囲であって、水準の最低限を下回っており、七〇年によりやく快適な生活水準の最低限に到達したと見なされる。

このほか、労働者の家庭に対する追加所得としては、主たる労働者以外の家族の所得・時間外労働・家畜の飼育による所得などが挙げられるが、これ

らは家庭の生活水準を大きく上下させるほどのものではなかった。以下それについて説明を加える。

付加的な賃金所得者が成人男子であつた場合は家族の所得にかなりの違いをもたらし、複数の男性労働者を持つ家族は裕福に暮らすことができたであろう。しかし、追加所得の平均やその性質からこれらの付加的な労働者のほとんどが、子供・青年・または女性であつたことが分かる。当時の女性労働者のほとんどは、家族を支えていかなければならない未亡人や、独身女性であり、家計に付加的な収入をもたらす女性労働者の数はわずかであつた。また子供たちが得る賃金は、子供自身の養育費をまかなうほど多くはなかつたとみなされるので、子供を多く育て働きに出すことによつて家族全体が快適な生活水準に達することは不可能であつた。

また、時間外労働は実際にはほとんど行われていなかった。なぜならば工場での普通の労働時間は十九世紀の始めには十二時間であり、終わりで十一時間であつて時間外労働のできる余裕がなかつたためである。このほか、自家消費のために、にわとりやぶたを飼い、余剰分を隣人達に売つていたということも考えられる。事実、一八三七年のウェストブロムウィッチ (West Bromwich) の調査では、全戸数二一九三軒のうち一九二軒がぶたを飼育していたという記録が残っているが、これも家計の足しになるほどのものではなかつた。

#### (5) 結論

結論として言えば、BCにおける生活水準はヴィクトリア時代の中期には実質上、上昇しなかつたのである。なぜならば、失業の割合が

高く、生活費が高かつたため実質賃金は上昇することがなかつたからである。

この研究によつてBCの労働者はその貧困の程度によつて次の三つのカテゴリーに分類された。つまり、全世帯数のほぼ二五パーセントにおける所得は、ようやく快適な生活を送ることが出来るものであり、二〇パーセントにおける所得は、その家族をほぼ永久に快適な水準の最低限のさらにその下で生活することを余儀なくした。また一方で、残りの五三パーセントはその所得で生活を維持していくことはできても、快適さを追求できるほどのものではなかつたのである。これらの割合は、その世紀の終わりまでほとんど変化することはなかつたのである。

#### 二「産業革命と家庭生活」

川北稔 「産業革命と家庭生活」

角山栄編『講座西洋経済史Ⅱ 産業革命の時代』

イギリスがその繁栄のピークを迎えたヴィクトリア時代に、いわゆる三世代家族——祖父母・親・子の同居——が産業革命後の工業地帯で増加することが指摘されている。工業化以前は大家族が優越しており、工業化が進展すると、単核核家族が進んだように考えるのは、十九世紀中頃までのイギリスに関する限り全くの俗説である。工業地帯におけるこのような変化は何を意味するのだろうか。

家族構成と貧困度を調査した結果、幼い子供を持つ夫婦と、子供が全て独立してしまつた老夫婦が最も貧しいという事実が現れた。自ら

稼ぎ得ない幼児は消費者として家計の負担になるばかりでなく、母親にとつても、育児によって工場その他における現金収入の道が閉ざされることを意味するのである。家庭外で現金収入を得るほどの労働が不可能な老人にも子守りは出来、そうなれば妻が働きに出ることも容易である。子供が働けるようになれば、子供の多い家庭こそが豊かな家庭であつた。従つて、乳幼児を持つ夫婦がその両親と世帯を共にする傾向は、最も弱い立場にある二種類の家族が貧困と闘う為の苦肉の策として併合したものであると言ふことができる。

以上の通り、産業革命期の労働者の家計収入に関しては、重要なことが二点ある。一つは、それが戸主である成人男子の賃金によつては測定し得なくなつたということであり、いま一つは、その場合の付加的な収入は、妻と子供によつてもたらされたということである。

結果として、工業地帯における三世代家族の同居は、貧しい労働者にとつての苦肉の策とは言えども、婦人の労働をただ「貧困の証し」と考え、妻や子供の収入を単に成人男子賃金の低下分の補完と考えるのは決して正しくない。例えば、産業革命期の国内需要はどこから来たのか、内外の観察者が等しく認める「イギリス貧民の奢侈」はどうして起こり得たのか、というように、既存の発想からでは全く答えられない問題も多いからである。

少なくとも、婦人や子供が工場で働き得た家族は、労働者階級の中では現金収入の多い家族であつたことは確実なのである。

## △おわりに▽

先に挙げたバーンズビー氏は、その論文の中でヴィクトリア時代にBCにおいて生活水準は上昇しなかつたと主張し、また、川北氏は「生活」水準の上昇とまで言うべきかどうかは別にして、全般的な消費水準の上昇が見られ、貧民にさえ、奢侈の傾向が見られたとしている。以下、これら二つの論文を比較してみる。

まず賃金についてであるが、バーンズビー氏はBCの労働者の生活水準が上昇しない理由として、実質賃金が上昇しないということを挙げている。彼は、BCに存在する労働者を分類し、各々の実質賃金の変動を見て、このような結論を下したのである。これに対して川北氏は、家族の全所得における婦人、児童の所得の重要性を指摘し、産業革命期の労働者の家計収入は戸主である成人男子の賃金のみからは測定し得なくなつた、ということを主張している。

次に付加的な所得を受け持つ、婦人と児童の賃金であるが、バーンズビー氏の論文では、児童の賃金は軽視されており、児童自身の養育費をまかなうほどのものではなく、婦人の賃金についても、それによつて家計全体がどのように変化するかということには触れていない。これに対して、川北氏は婦人・児童の賃金を重視しており、それによつて夫は生活活動のリーダー、唯一の現金所得者としての役割りを失い、妻は主婦としての機能を失つたと指摘している。そして妻や子供の賃金の家計に占める割合の重要性を三世代家族の同居を例にとつて説明している。

このほか、家計において食費の占める割合であるが、バーンズビー氏の論文では、食事は質素であるとされていたが、エンゲル係数を測定

してみると、約五〇パーセントを示し、当時としては、かなり生活水準が高かったと考えることができよう。

以上のように、バーンズビー氏の論文と、川北氏の論文は多くの点で対立するわけであるが、決定的に異なる点は、バーンズビー氏は戸主の賃金から労働者の生活水準を検討しているのに対し、川北氏は、労働者の生活水準は、戸主の賃金のみでは測定し得ないとしている点である。この場合、バーンズビー氏の論文では戸主の賃金については資料が豊富であるのに、婦人・児童に関する資料が挙げられていないという欠点を持つ。

また、バーンズビー氏の論文は、他の地方と大差は認められないとしても、BCという一地方だけを問題にしているものである。しかし、一地方だけを取り上げているため、具体的な数値を基礎にしているとも言えよう。これに対して、川北氏はイングランドの工業地帯一般を考えているため、具体的な数値に乏しいということが挙げられる。

産業革命によって、労働者の生活水準がどのように変化したかということは、重大な問題であり、焦点の置き方、資料の用い方によって結論が異なってくる。今後様々な論文や資料をもとにして、この問題を考えていきたいと思う。

(注)

(1) George J. Barnsby : The Standard of Living in the Black Country during the Nineteenth Century ; in : Economic History

Review, Second Series, Volume XXX, 1977, p. 221

(2) Ibid., p. 221

ブラック・カンツリーにおける坑夫の生活水準の指数

(1850 = 100)

1 : 1日当たりの坑夫の賃金

2 : 実質賃金の指数

Year	1	2
1839	3 9	84
1840	3 6	80
1841	3 3	82
1842	2 4 $\frac{1}{2}$	70
1843	2 9 $\frac{1}{2}$	89
1844	3 6	103
1845	4 0	118
1846	4 9	123
1847	5 0	110
1848	4 0	109
1849	3 6	111
1850	3 0	100
1851	3 3	111
1852	3 6	117
1853	3 6	106
1854	3 6	81
1855	3 6	82
1856	3 9	89
1857	3 9	95
1858	3 9	117
1859	3 6	102

Year	1	2
1860	3 0	74
1861	3 0	79
1862	3 0	88
1863	3 0	91
1864	4 6	143
1865	4 3	118
1866	4 0	103
1867	4 0	106
1868	4 0	114
1869	4 6	134
1870	4 9	133
1871	5 0	141
1872	5 0	133
1873	5 6	141
1874	5 0	131
1875	3 6	100
1876	3 6	99
1877	3 0	83
1878	3 0	88
1879	2 9	78
1880	3 0	84

Year	1	2
1881	3 3	96
1882	3 0	89
1883	3 6	111
1884	3 6	124
1885	3 4	127
1886	3 4	127
1887	3 4	126
1888	3 9	140
1889	4 0	153
1890	4 8	179
1891	4 8	159
1892	4 8	178
1893	4 8	183
1894	4 4	194
1895	4 4	188
1896	4 4	184
1897	4 4	175
1898	4 4	165
1899	4 7	189

sources : Miners' wages 1839 to 1864: Wolverhampton Chronicle; Miners' wages after 1864: Miners' wages for the Past 45 Years, pamphlet issued by the Miners' Association (1909), in Staffs. Record Office (Ibid., p. 230)

(4) Ibid., pp. 225~226.

(主要参考文献)

(1) 角山栄 『産業革命と民衆』

生活の世界歴史10 河出書房新社

(筆者は三十一期生)